

「そやかて、さうや無いかい。美芳屋はん。この人は西南の方角や。ほれ。あつちの方に遙かに妖氣が立ち昇つてまつしやろ。あの方角や。」

「はあ。西南どすか。さては鳥原方面どすのやな。さうどすか。そら、怖おすな。弘文堂はん。ほんまどすか。」

「へえ。嘘だつせ。こいつが勝手なこと言ひよるのだんがな。」

「あはははは。」

美芳屋はやはり腹を突き出して悠然と笑つてゐた。

それから二三日して美芳屋は煙草屋へ出かけて行つた。

「こないだ高雄へ行きまひてな。あんたに好う似た人見かけまひたで。そやおへなんだか。」

「さうどすか。そら違ひまつしやろ。私もう長いこと出えへんさかい。」

娘は例の通り陰氣な顔を眉ひとつ動かさなかつた。

「お母ん。あんた芝居どうどす。嫌ひどすか。」

美芳屋はにこにこして話しかけた。

「いま南座へ延若が来てまつせ。どうどす。一つ一緒に行きまへうか。丸橋忠彌が途方ない好えちうことや。わたいだけ離れてたら分からへんさかい。静さん。あんたはどうどす。」

美芳屋は近頃しきりに何か檀那の威光を見せたくて堪らなくなつた。そこで、とうとう大奮發をして芝居行きを持ち出した。

「へえ。大きに。」

ところが、二人とも思つたほどに喜ばない。

「それよか、私一ぺん面白い活動見たい。」

とうとう了ひに母親が言ひ出した。

「活動どすか。活動ならわけ有らへんがな。一つ行てお出でやすな。いま朝日館に好えのが掛かつてるちうことや。一つこれから行てお出でやす。思ひ立つたが吉日や。静さん。あんたも一緒にお行きやす。今日はわたいが留守番してて上げう。」

「そないなこと、檀那はん。」

母親は驚いて、眼を圓くした。

「なに構しまへんがな。反つて面白おすがな。わたい斯んなこと大好きや。なあ。直ぐ仕度してお行きやす。なあ。靜はん。さうしよう。」

「へえ。あの、ほんまは、わたし出歩くの餘まり好きやおへんのどつせ。やつぱり斯うひて内で話してるのが一番好えのどつせ。」

娘は淋しく微笑した。

「さうか。陰氣な性分やなあ。」

美芳屋はちよつと厭やな顔をした。

「へえ。そひたらな。お母ん。あんただけ行かひて貰たらどうや。わたし留守番してますさかいな。そんなら、檀那はん。折角どすさかい、さうひて上げとくれやす。」

「さうか。そんなら、さうおしやす。」

美芳屋は、思つた半分も散財しすに濟むと思つて、内心かへつて大喜びであつた。

「そひたら、これで歸りにどつかで一杯やつてお出でやす。」

美芳屋は縮緬の袱紗をほどいて、澄まして五圓札を一枚差し出した。

「まあ。檀那はん。斯んなにたん。」

「まあ宜しがな。まあ取つと置きやす。人間ときどきは命の洗濯せんと明かん。」

美芳屋はすつかり得意で上機嫌である。

その迹で美芳屋も、近所の魚屋から二三品取り寄せて、娘の酌で一杯やつた。

婆さんが歸つて來たのはもう可なり遅かつたが、美芳屋はまだ娘の膝の傍にごろりと横になつてゐた。婆さんはやはり當り前の顔で歸つて來たが、それでも珍しくその晩は少し眼が据つてゐた。

いつか美芳屋も娘が身重になつたのを知つて居た。初めは思ひかけなかつたので思はず憚いたが、しかし、直ぐ反つて非常に喜んだ。

美芳屋には男の子が一人も無い。そして、無論もう女房に出来る氣遣ひはない。それはもう可なり前から美芳屋は氣になつてゐた。ところが、それが近頃になつて、急にまた不思議

なほど行く先先の事が気がかりになつて来た。

「やつぱり養子せんならんのかいな。」

さう思ふと、美芳屋は、思はずがつかりして、カも何も抜けて了ふやうな気がするのである。折角汗水たらしてこれまでに爲上げた自分の店を、ならう事なら、譬へそれが片輪であつても好いから、自分の息子の手に渡したい。實を言ふと、近頃美芳屋はその事ばかり考へて一人で塞ぎ込んでゐた。

ところが、そこへ思ひがけなく「靜はん」が孕んだ。ことによつたらそれが男の子かも知れないと思つて、美芳屋は思はず飛び立つやうな氣持がした。久しいあひだ頭の上に重く覆ひ被さつてゐた不快なものが、からりと一度に取れて了つたやうな氣持がしたのである。それから目立つて美芳屋は浮き浮きした様子を示して来た。

「ひよつとあれが男の子やつたら、女房にも話してちやんと内へ入れたらう。女房かて反つて喜ぶやらう。養子みたいなもの、實際、好え位のものやさかいな。」

どう言ふわけだか、美芳屋は、今度こそは男の兒が生まれさうな氣がして爲方がないのであ

る。

「うん。きつとさうやで。今度こそ男やろ。こんなこと割に當るもんや。蟲が知らすてなもんや。」

ふと美芳屋は、どうせ女房ももう長いことは無いのだから、その迹へはあの「靜さん」を入れたらどうだらうと考へた。すると、それはやつぱり何だか都合の悪いやうな、またやつぱり結局はさうなつて了ひさうな、どつちとも附かん頗る變な氣持がした。

「まあ、何でもそんな事は迹の事ちや。まだ急かへんがな。」

しかし、美芳屋は愉快であつた。何だか急に世のなが明るくなつたやうな氣持がした。

「靜さん。男の兒お生みやつしや。へえ。男を。金時でないか明かん。なあ。奮發して金時をお生みやつしや。」

一日、美芳屋は娘にさう言つた。

「そんなこと言つたかて、檀那はん、そんなわけに行かしまへんがな。そんな勝手なこと出来ませないな。」

「いや。そんなこと有らへんで。そら、何でも氣のもんや。男生まんならんと一心に思てたら、きつと男生れますで。おきばりやす。へつ。勇氣お出しやす。人間なんでも勇氣を出さんと明かん。」

「困るわ、わたし。そんなことお言ひやしたかて、そんなわけに行かへんわ。」
娘も珍しく嬌へた調子で苦笑した。

年を越すと、美芳屋は復た毎日野球の練習を眺め出した。雪持ち風のびゆうびゆう吹くにも挫けず、運動場の片隅にしゃがんで、震へながら熱心に猛練習を眺めてゐる。快技術をやるか、または好い安打が出るかすると、美芳屋はにやりと會心の笑を洩らして、思はず短かい首を延して上へ延び上るやうにする。どんな場合にも、決して端たなく手を叩いたり聲を出したりはしないのである。

一日、そこへ、偶然、弘文堂が通りかかった。

「相變らずお熱心だんな。」

弘文堂も笑ひながら傍へ寄つて来て、ちよつと立ち留まつて一緒に眺めてゐた。

「旨うならはりましたなあ。」

「へえ。お蔭さまで。これなら負けても見とも無い負けはせえしまへんやろ。」

美芳屋は何だか自分の事のやうに言つてゐる。

「へえ。負けるてなこと有らしまへんやろ。今年ことしは勝ちまつせ。そらきつと勝ちまつせ。そいでも、あんたはん、この寒いなかに好うさうやつて見てはりまん。わたい等ちよつと通つただけでも敵んがな。」

「へえ。まあ道樂どすさかいな。」

「ほんまにさうだんな。そいでも、こら好え道樂や。こんな好え道樂は無いわ。」

「その代り随分と寒おつせ。震へ上りまつせ。冷たい道樂や。」

ふと美芳屋は笑つて、

「時に、その後あの方はどうどすのや。あの西南の方角は。」

「へつ。西南の方角。」

たれ生へ世のこが兒嬰てしうか

弘文堂は思はず目を圓くしたが、
「はあ。あれだつかいな。あれはどうも早や。へへ。」
弘文堂は卑しく笑つて頭を掻いた。

そのうち、次第に春めいて来るに随つて「静さん」のお腹も次第に迫り出して来た。

「これからが私かなんのだつせ。次第に着物が薄なりまつしやろ。餘計目に立ちますがな。」

「構へんがな、何も。どうせ出来るもんや。ただ、何でも金時をお生みやつしや。金時が好え。お姫はん、さつぱり感心せん。」

「復たあないなと言ははる。私かなんなあ。ひよつと女子はんやつたら、私どうしよう知らん。」

「へへ。そんなこと有らへんたら。今度はきつと男やたら。どうひてもさうやと言ふ氣がするがな。」

一日、美芳屋は商用で朝早く家を出たところから、途中で午飯を済まして、いつもよりはすつと早く煙草屋へ訪ねて行つた。どうしたのか、その日は珍しく店に静さんの姿が見えなかつたが、格別氣にも留めず、いつも這入る横手の潜戸に何心なく手をかけたその途端に、突然、潜戸が内からがらりと明いた。思はずはつと恟くりして身を引くはづみに、内から半身のり出した小柄の男と、間隔一尺とは離れず、びたりと顔と顔とを突き合はせて、

「や。これは。」

「はあ。これは。」

両方とも思はず一瞬立ち竦んで了つた。それが同じ町の弘文堂だつたのである。

「さあ。どうぞ。」

すばやく弘文堂が身を開いて、さう言つた。

「へえ。まあ。どうぞ。」

まだ惘然立つてゐた美芳屋もやつと我に返つた。

「どうぞ、まあ、お先へ。」

「へえ。まあ。あんたはんから。」

美芳屋は何だかまだ上の空で、ただ鸚鵡返しにさう言つた。

「さうだつか。そんなら御免やす。お先へ。」

するりと傍をすり抜けて、

「へえ。左様なら。どうも失禮しました。御免やす。」

まるで駈けるやうにして弘文堂は一散に向うの角を廻つて了つた。美芳屋は唯だほかんと暫くその迹を見送つて居た。

やがて、そつとそこを立ち去つて、美芳屋はどこと言ふあても無く、ただ歩き出した。初めは唯だすつかり顛倒して了つて、何が何だか丸でわけが分からなかつたが、やがて次第に心が落ち着いて来るに随つて、何とも言へない厭やな氣持が漲つて來た。

「一體こら何や。何てことや。」

西南の方角。ふとそれが矢のやうに頭を掠めて、美芳屋は思はずどきんと往來の眞ん中に立ち竦んで了つた。煙草屋は美芳屋や弘文堂の書生町からちやうど西南に當つて居たのであ

る。

「あの方にかけてたら斯んな敏捷いやつあらしまへんぜ。」

さう言つた誰かの言葉。高雄の人ごみでちらりと「靜さん」らしい横顔が見えたかと思ふと、直ぐその迹で弘文堂に出逢つたこと。それから、今のまるで「躰」のやうに素早く逃げ出した弘文堂のあわてた様子。そんな事がごつたになつて丸で稻妻のやうに一度に美芳屋の頭に閃いた。そして、今はじめて總てが分かつたやうな氣持がした。

「へつ。お腹の赤ん坊かて、誰の子やら知れたものやらへん。」

心から忌忌しさうに呟いた。

「道理で安いと思たがな。」

美芳屋は苦笑してやつと歩き出した。

「ふん。それでも、早よ知れて好かつたがな。へえ。うつかりしてたら、えらいば掴みする所やつた。おお。怖。」

傍を通り抜けた自轉車の小僧が驚いて振り返つたのにも氣が着かず、美芳屋は夢中になつ

て一人ぶつぶつ言ひながら歩いて行つた。しかし、何と言つて見ても、皆ことさらに自分で自分に言ひわけをするやうで、美芳屋は何とも言へない不快な氣持の押へやうがなかつた。それから一時間ほどぐるぐる街を歩き廻つた擧句に、何と思つたか、美芳屋はまた煙草屋へ訪ねて行つた。いつもの通り知らん顔をして這入つて行くと、「靜さん」は休んで居た。「はあ。あんた悪おすのか。」
「へえ。大した事もおへんけど。」
「さうか。そらいきまへんな。氣をおつけやすや。大事なからだやさかい。」
「へえ。大きに。」
大していつもと變らず口を利用しては居たけれども、どつちもひどく冷淡な様子であつた。やがて美芳屋は、今日は少し急ぎの用事が有ると言つて、間もなく歸つて行つた。婆さんは使ひに行つたと言つて、その日は家に居なかつた。
家へ歸つてからも、美芳屋は、さんざん寢て居る女房や娘たちに當り散らして、一人で膨れ返つてゐた。近來これほど機嫌の悪い美芳屋は家内の者もついぞ見たことが無いからで

あつた。
その翌日、偶然、風呂屋で復た二人が出逢つたものだから、どつちもすつかり照れて了つて、ひどく拙い具合であつた。
それから美芳屋はぶつくり煙草屋へ行かなくなつた。
丁度そのとき野球の仕合が近づいて、美芳屋も、選手と一緒に東上して、仕合の迹では花も見たり、途途見物もしたりして歸つて来て、ちやうど二月ほど煙草屋の町の近所も通らなかつた。
一日、何と思つたか、美芳屋はまたぶらりと煙草屋の横町へやつて来た。すると、思ひがけ無く、煙草屋の店は戸が締つてゐて、おまけに大きく「かしや」の札が貼つてある。美芳屋は悔くりして、きよろきよろ邊りを見廻した。
「あの、お邪魔ですが、ちよつとお尋ね申します。」

たれ生へ世のこが兒嬰てしうか

美芳屋は角の魚屋の前に立つてゐた。いつか二三度ここから酒の肴を取つたことがある。

「へえ。何とす。」

「ついそこに煙草屋がおしたな。」

「煙草屋。へえ。おした。」

「わたいとこ實はまだちよつと掛けの残りがおすのやがな。あの家どこぞへ移らばつたのどすか。いま行つたら空家になつたりしますな。」

「へえ。あの家なら伏見へ越さりましたで。」

「へえ。伏見へ。さうどすか。」

「あれがいつ頃やつたいな。それから一遍お婆んが來はりましたがな。」

「伏見の一體どことすやろ。」

「さあ。つい聞きまへなんだな。伏見とだけか聞きまへなんだなあ。何やつたら聞いとすけど。」

「へえ。大きに。へえ。なに。ほんの鼻糞ほどとすけどな。」

たれ生へ世のこが兒嬰てしうか

「實はあれわたいとこの借家どしてな。」

「ああ。さうどすか。」

「またお婆ん寄らはるかも知れまへん。」

「一體あの家何とすのや。若い娘はんがおしたなあ。」

「へえ。おした。」

「あれ何とすのや。お妾はんどすか。」

「へえ。まあ、そないなもんどつしやろ。」

魚屋も一緒ににやにや笑ひ出した。

「そやかて、腹ほてどしたやろ。」

「へえ。あんたはん好う知つてどすな。」

「そら分かりますがな。あないなつたつたら。あれもう出來まひたのか。」

「へえ。向うで生まはつたさうどす。お婆んさう言うてました。」

美芳屋は胸がどきどきして、思はず息をばづませた。

「さうですか。それで、一體どつちやどしたのやろ。嬰兒はん男どしたのやろか。」

「さあ。どつちやどしたやろな。つい、そこまで聞きまへなんだな。」

「さうですか。へえ。大きにお邪魔しました。」

美芳屋は急いで歩き出した。

ちやうど去年はじめて美芳屋が娘を見に来た時と同じ時候になつて、やはり同じやうに靜かな街のあひだを涼しい風が通ひ、晴れた空には鳶が高く廻つてゐる。

實を言ふと、美芳屋は、あれから時が立つに随つて、不思議なほど「靜さん」が戀しくなり出した。近頃は毎日その事ばかり考へて塞ぎ込んでゐる。しかし、このまま出向いて行くのは、いかにも見す見すこつちから鼻毛を讀まれに行くやうな氣持がして、見得坊の美芳屋はどうしてもその氣になれないのである。以來、美芳屋は、これまで會て覺えたことの無い一種變に焦焦した不快で堪らない日を送つてゐた。

殊に、美芳屋は當人の「靜さん」以上にそのお腹の子供のことが氣になつた。外のことは

どうでも、あの子供だけはどうしても自分の子供に違ひない。さう言ふ氣持が日が立つに連れてますます強く募つて來た。しかも、今度こそはきつと男の兒が生れるに違ひないと言ふ氣が、了ひには丸で一種抜くことの出來ない確信のやうになつて了つた。萬一、自分が斯うして下らない意地を立て通して剛情を張つて居るあひだに、せつかく大事な自分の店の跡取りをどこかへやつて了ふのではなからうかと思ふと、實際美芳屋は居ても立つても居られぬやうな氣持がした。

「と云うて、誰の胤や知れん嬰兒を掴むのは敵んしな。」

そのうち、間に立つた化粧品屋の後家さんから何か話があるだらうかと心待ちに待つてゐたが、更に何の音沙汰も無い。

了ひに、色んな心配からして美芳屋は少し瘦せた。

とうとう辛抱がし切れなくなつて、その癖ほんとうはと言ふつもりなのだか自分でも好くは分からずに、今日ぶらりと横町へやつて來た。すると、思ひがけ無く、母子はどこかへ越して了つて、もう居ない。不意にべしやりと土足で顔でも踏みつけられたやうな極度の憤

怒と、見す見す大事な寶を取り遁して了つたと言ふ、何とも言へない残念な氣持とが、一度に美芳屋を襲つて來た。實際、美芳屋は泣くにも泣けない口惜しい氣持で突然一杯になつて了つた。

「あたいは阿呆や。確かに阿呆や。」

とうとう口に出してさう言つた。眼には何だか涙が浸んでゐる。

やがて、ふと思ひついて、美芳屋は急いで例の化粧品屋のはうへ歩き出した。

「御免やす。」

それでも、いつもの通り機嫌の好い顔をして這入つて行つた。

「まあ。美芳屋はん。先度から私だけあんたはんのお出でを待つてましたか知れえしまへんがな。」

「さうどしたが。例の一件どつしやろ。例の煙草屋の一件どつしやろ。」

「へえ。それぞれ。私、一體どないなつたのやら頭からわけが分かりまへんのやがな。」

「伏見へ越さはつたさうどすな。」

「さうどすてな。あんたはん相談に乗らはつたのどつしやろ。」

「いや。わたいも知らへんのどすがな。つい今、近所で聞いた所やがな。」

「へええ。さうどすか。そんな事あらしまへんやろ。」

「さうやて。わたいも聞いて惚くりひてる所やがな。」

「さうどすか。ほんまどすかいな。」

「ほんまや。えらほんまや。一體、伏見のどことすのや。」

「それ、私も知りまへんのどすがな。私と一へは一言の挨拶もなしに行かはつたのどすさかい。」

「さうか。そらひどいな。わたい、あんた所で聞いたら分かる事ちやと思てたがな。」

「私はまた、あんたはん聞いたら分かる事ちやと思てましたがな。そやさかい待つてましたのどすがな。」

思はず二人は顔を見合はして笑ひ出した。

「それに、この間はまた、どこで私とこのこと聞かはずつたのか、ひとり知らんお方がお出でやしてな。やつぱりあの煙草屋はん伏見のどこへ越さはつたんやちうて聞かはるのどすけどな。やつぱり分からしまへんがな。」

美芳屋はふと耳を傾けた。

「へえ。知らんお方が、どないな人どした。」

「どないなて、丸きり知らんお人どすがな。」

「男はんどしたか。」

「へえ。男はん。まだ若い男はんどしたえ。」

「何と違ひますか。瘦せたな。小柄な三十ぐらゐの人と違ひますか。髪を分けた、目のくるくるした。」

「へえ。そ、その通りどす。美芳屋はん。あんた知つてどすのか。」

後家さんはすつかり驚いて了つてゐる。

「はつは。お上さん。そないな事くらゐ氣の着かんわたいでもおへんがな。」

美芳屋は思はず得意になつて、にやりと脂下つた。お上は尙のこと驚いた。
 「美芳屋はん。何どすのや。あの女、何ぞ情夫でもおしたのか。」
 「まあ宜しがな。そんな事どうでも宜しがな。そんな事ごてごて洗ひ立てするほど野暮なわたいでもおへんがな。」

「へえ。そらさうどす。そら、あんたはんは粹におす。けど、ひよつとそないな事がおしたら、私が濟みまへんがな。私があんたはんはんに申しわけおへんがな。」

嘘か本當か、お上は實際蒼くなつて居る。

「宜したら。そんな事どうでも宜したら。その事はもう一切言はんことにしまへう。一切鴨川の水に流しまへう。あははははは。」

美芳屋はすつかり上機嫌になつて了つた。

煙草屋のまへで「かしや」の札を見た瞬間に、それはてつきりあの弘文堂の指金だと美芳屋は一途に思ひ込んで了つた。ところが、今その弘文堂も煙草屋の轉居先を知らないと言ふことが分かつて、美芳屋はまた一度に安心して了つた。そして、同時に、

「やつぱりあの兒はわたいの兒や。わたいの兒に相違ない。」
さう言ふ確信がまた一度に蘇つて来て、

「事によつたら今頃は内の總領がびいびいやつてるかも知れへんのやがな。」
さう思ふと、美芳屋は、忽ち喜悅滿面、惘れて唯だまじまじ顔を眺めて居るお上を見返つて、

「ところでや。お上さん。あの女、實はこれやつた按排や。」
美芳屋は手でお腹の膨らんだ恰好をして見せた。

「へえ。そのこと私もちよつと聞きました。」

「つまりそこや。もし嬰兒が出来たらや。わたいのああして世話をして来たもんや。出来るだけの事はしてやり度いがな。ほかに男が有つたかて構へん。ほかに檀那を取つてたかて大事ない。また、その嬰兒が誰の胤やつたかて、そないな事どうでも宜しのや。唯だわたいはなるだけの世話はしてやり度いと、かう思ひますのやな。この儘になつたら、わたいかて氣持が悪いがな。」

「まあ。美芳屋はん。」

お上は思はず涙ぐんでゐる。

「まあ。あんたはん見たいなお方がおすやろか。私なんやら勿體なうなつて來まひたがな。」
お上はそつと前垂で眼を押へた。

「あつはつは。そんなことは有らへん。そんなことは無いけど、唯だわたいはするだけの事はせんと氣の濟まん性分や。性分やさかい、爲様が無いがな。」

美芳屋は、ますます得意になつて、いつもの重い口が思はず能辯になるのも氣が着かず、
「そこで、ことによつたら子供はわたいの方で引き取つて世話をしても好え。何さま、あの家もあ言ふ暮しやさかい。よそへ預けるちうたかて大變やろ。そこで、重ね重ねあんたはんにお世話やが、一つあの女の所つき留めて貰へまへんやろか。そして、一つ好うわたいの腹を話して貰へまへんやろか。」

「へえ。宜しおす。承知しまひた。ちよつと心當りもおすさかい、きつと搜して來ます。そひて、きつとさう申します。まあ、あの人どない喜ばはりまつしやろ。きつと泣かはりまつ

たれ生へ世のこが兒嬰てしうか

せ。ほんまに罰が當りますがな。」

お上は復たそつと眼を拭いた。

「あつはは。そんな事あらへん。そんな事あらへんけど、どうも爲様が無いがな。まあ斯ういふやうなもんや。そいでは、どうぞお願い致します。済みまへんが、どうぞ一つ大急ぎでな。」

「へえ。承知致しました。近日きつと好え御返事を致します。」

「どうぞわたいの心持を好う向うへ話してな。決して何も氣にすること有らへんさかいて、好うさう言うといってお呉れやす。きつと心配してまつしやろさかい。」

それから暫くすると例の通り雪駄を引き摺つて、大きな腹を突き出して、悠然と鴨川を東へ渡る美芳屋の姿が橋のうへに見受けられた。いかにも落ち着いた様子をして、片手に挟んだ巻煙草すばすば、さも快けに青葉の東山から川下のはうを見渡した。

かうして嬰兒がこの世へ生れた

定價 壹圓五拾錢

有 限 公 司



大正三十五年六月十日印刷
大正三十五年六月五日發行

二 林

著 者 高 倉 輝

發 行 者 北 原 鐵 雄
東京市小石川區美町九番地

印 刷 者 山 本 源 太
東京市小石川區久堅町四十五番地

發 行 所 東 京 小 石 川 表 町 一 〇 九

電 話 小 石 川 三 五 七 〇 番
振 替 東 京 二 四 八 八 八 番

高倉輝著作品集

| 第七輯 | 第六輯 | 第五輯 | 第四輯 | 第三輯 | 第二輯 | 第一輯 |
|--------|-------|------------------------|----------------|----------------|----------------|-------|
| 阪 | 長谷川一家 | かうして 嬰兒がこの世へ 生れた | 我等いかに 生く可きか | 海峽の秋 | 蒼空 | 女人焚殺 |
| (長篇小説) | (戯曲集) | (短篇集) | (感想集) | (戯曲集) | (長篇小説) | (戯曲集) |
| 近刊 | 近刊 | 壹圓五拾錢 送料拾參錢 | 壹圓廿錢 送料拾參錢 | 壹圓貳拾錢 送料拾參錢 | 壹圓五拾錢 送料拾參錢 | 増版中 |

感想集

・ 飯倉だより ・

…… 島崎藤村氏著 ……

山本 羅氏裝幀・四六判特製箱入美本

金のやうな静けさと光とを持った藤村氏の感想集である。むつつりと、然し誠實さのこもつた口調で、其の書齋に於ける東西文藝の批評を聞く思ひがする。この一巻を通讀すると、氏の性格、氏の人性觀といふやうなものが、字句の間に一々脈絡を保つて生々して來るのを感じる。「朝を思ひ、又夕を思ふべし」と云つた芭蕉の言葉に思ひ入つた著者が「初戀を思ふべし」と度まく言ひ放つてゐるのも、彼の「新生」を書いた著者が、マスカルの「心胸には道理に知られない道理がある」といふやうな言葉を抄録してゐるのも意味深いことだとの頁を開いて見ても、人間苦に徹した人でなければ現はし得ない言葉——全人格——が嚴肅に迫つて來る。そして其の明澄な文章は、靜かなるものゝ深さ、短かきものゝ鋭さと云ふやうな事が、泌々と味はれる。數行の短い文章にも生命の輝きがある。讀むよりも味はふべき心の糧として江湖に推奨する。

定價壹圓五拾錢・送料拾七錢

長編小説

・ 結 婚 ・

…… 山崎斌氏著 ……

山本鼎氏裝幀・四六判フランス綴美本

純潔にして教養ある新代の一處女の結婚前後に於ける生活、異性に對する悩み、恐れ、憧れ、草の葉の如く戦けるデリケートな女性の心理そのまゝを繊細な筆觸を以て描出した稀有の一大雄篇。

彼女が生む「結婚」を中心として書かれてあります。然し私は、そこに彼女の全生涯を通じての悲劇を見る様な心持がしてゐます。それは性格上の破綻か？否々、それは寧ろ社會組織の缺陷にある様に思はれます（著者）

はづ子は清澄な温泉の中に、半ば隠されて、いよく美しい彼女の乳房と、息づいてゐるかの様な匂はしい、白い胸とを眺めやつた。この胸に抱かれてゐる健康な、美しい胸！それは常に彼女の○持であり歡喜であり自慰であつた。

この胸、たれに
この胸、さん！
この胸、さん！
この胸、さん！

情しあふ年、初夏の日に、あの利根川の畔のアカシヤの樹の下に、獨り聲にまで出して見た、この言葉がそこに思ひ出されて居た。（十九頁より）

第二の國木田獨歩が生れた

島崎藤村新著（飯倉だより）より

定價壹圓貳拾錢・送料三十錢

著 ッ ッ ラ ト ュ シ

究 研 の 美 性 女

譯 郎 太 德 田 安

科學と藝術と・生理學と美學との融合

寶石、白粉、燕脂、香料、綺羅びやかなる美服に飾られたる近代婦人も、一度此等借物の粉飾を脱し去れば、その容姿、その身體の如何に悲しくも哀れなるか。眞の美は身體の健全と肉體の美化にあり。裸に歸れ、裸を誇れ。シエトラッ博士の勇敢なる裸體文化運動は、今や全世界に瀕り、科學と藝術、生理學と美學とを融合せる獨得の衛生學は、從來卑俗低級に墮したる婦人生理を九天の高きに引きあげたり。眞に徹底せる近代科學の精粹、埋れたる美と愛の發見、駭目すべき世界的の大著也。今や譯者數年の努力と精進によりて本書成る。敢てあらゆる女性、すべての男性、醫師、教師、美術家諸君の必讀を薦む。

概目

婦人の身體の構造・體形の美化・營養と新陳代謝・皮膚の美化・衣服・身體各部の美化・婦人の種族生活・子供時代・成熟・結婚と結婚生活・妊娠・分娩・産褥・青春期・更年期・老年

女性のために説ける平明健全なる衛生學

定 價 五 圓 五 拾 銭 ・ 送 料 七 拾 銭





終